チベット語接續辭 te について

山口瑞鳳

Ⅰ はしがき
Ⅱ 版本に於ける用法——その分類と定型的敍述補語について
Ⅲ チベットの文典家による分類と te 辭の起原について
Ⅳ 古碑文等に見られる表記法と用法上の區別
Ⅴ あとがき

Ⅰ はしがき

今日、版本によつてチベット語を讀むとき、我々は各種の曖昧なものを經驗する。一つに文章構造について我々のもつ理解が貧困すぎることに由來する。

文章構造に關する理解が曖昧であれば、文要素の働きについても正しい認識を持ちえないであらう。その結果、我々がチベット語から讀み取れるものを限定してしまふ。どのやうな限定を受けるであらうか。外國語の會話を始めた者について考へて見るとよい。當初どのやうな理解の仕方をするか。やがて、どのやうな場合にどの種の言ひ廻しをするかを會得するであらう。この程度のものを「通辯」的理解とするならば、今日、版本チベット語に關する我々の理解は、正しくこの線を出

ないものと云へるであらう。

外國の學者は、主として印歐語流[1]に理解する。彼等は假空の分類さへしてゐるのである。我が國の學者は、慨ね國語流である。ただ、今日、歐洲の學者には「通辯」的理解を脱[2]しようと試みるものもあるが、殘念ながら、我國にはそのやうな傾向さへも見ることが出來ない。

我々は、從來、サンスクリット語文獻の缺を補ひ、誤寫を正すため、チベット語を知る必要があつた。その爲には、通辯的理解だけでも可成りの成果が得られた。然し、併行するサンスクリット語文獻を缺く場合、この曖昧さは致命的になる。自信を以て「通辯」すら出來なくなるからである。

この場合、la langue artificielle の名稱は、名づけた Jacque Bacot 氏の眞意はともあれ、曖昧さに目をつむつて唱へる呪文として利用されかねないのである。が、如何に新奇と見える表現形態も、本來、チベット語の基本的な構造樣式に副はなければ、チベット語として採用され得なかつたであらう。

從つて、チベット語も、他の言語と同じく、例外には充分な說明を要するわけである。或る場合に存在するものが、他の場合に理由もなく消えたり、用ひられなかつたりするわけはない。

ここに取上げる接續辭 te, de, ste 等も、曖昧な經驗を與へることには一役買つてゐるものである。

この一群として扱はれる三つの接續辭を分類して見ると、そこには、全く異質的な二つの働きが認められる。この事實とは別に、チベットの文典家の記述には一つの奇妙な節がある。今日一群として扱はれてゐるこの接續辭の働きが、二ケ所に於いて獨立に言及されてゐることである。第三に、古碑文に於いてこの種の辭が今日のものとは異つた表記法のもとで示され、しかも、そこに區別の痕跡がある。このことは燉煌文書でも確認されるところで、決して表記法の混亂とすることは出

來ない。

以上の點から、文章構造の分析を手がかりとして、これらの接續辭についての考察を試みる。ただ、「通辯」的理解から實際どの程度脱し得たか、私の意圖にも不拘、必ずしも香ばしくないかも知れない。大方の御叱正をお願ひして置きたい。

この稿をまとめるに當つて、渡邊照宏先生と河野六郎先生からは、有益な御注意を頂いた。又、王生台舜先生からは、貴重な資料を借用させて頂いた。併せ記して深く感謝申し上げたい。

引用文について特に後記のないものは Jacque Bacot: "Grammaire du tibétain littéraire" II から引用した。

註

(1) 例へば動詞を分類して「過去」「現在」「未來」とする。實際には彼等の云ふ「三時」の形はない。又、「過去」とするものには〃現在の狀態を示すもの〃も含めてゐる。「現在」「未來」とされるものは超時的述語を誤り稱したものである。cf. p. 86 註(4)

(2) Jacque Bacot: Grammaire du tibétain littéraire I, 1948.

Jacque Dürr: Morphologie du verbe tibétain, 1950.

Ⅱ 版本に於ける用法——その分類と定型的敍述補語について

今日版本に見るチベット文を材料として我々の分類を試みよう。

三つの接續辭 ste, te, de によつて示される働きは、大別して二種になる。一は、Palmyr Cordier[1] の言ふ動詞の接續をするもの、それを含めた用法で、この辭をはさむ二つの表現內容に時間的前後關係のあるもの。他は、彼の批評をした Jacque Bacot 氏が指摘する、それ以外の用法を含む一種である。後の一種に於いては、辭は何らの時間的前後關係の存在も保證しない。或る場合には辭の前後の文又は文要素を置き換へても、表現內容に本質的變化を起さない。後にその例を

見るであらう。

前者に屬するものを第一種とする。これは細かく三つの用法に分けることが出來る。後者の用法を第二種とする。この方は、三つに類別出來、更に細分することが出來る。今、先述の相違を示すために代表的用例を示す。

I. sgo rgyab-*ste* ḥdi-ru śog [situ] (ra)

戸を閉めてここに來たまへ。

II. nor-gyi mchog ni sbyin-pa-*ste*/ bde-baḥi mchog ni sems-skyid pa//

寶の最勝なるものは慈心にして、幸ひの最勝なるものは寂靜なり。

第一種は次のやうになる。

a. lha mchod-*de* las byaʼ [situ]

祭祀して仕事が始められる。

b. mdaḥ ḥphaṅs-*te* phog

矢が放たれて（的に）當る。

c. tsheg-sgra daṅ bcas-*te* ḥbar [situ]

音をたてて燃える。

これらの接續辭は、例へば bas (pas), nas などのやうに、時間的先行性を積極的に示す働きをもつた助辭とは區別され

ねばならない。辭をはさむ二文の間に既に存在する時間的前後關係が、この辭によつて認定されながら二文が單に接續を得てゐるのに過ぎない。從つて、それらの關係が存在しない場合に用ひられては意味をなさない。卽ち、接續助辭とは呼ばない所以である。

(a) では、相前後する二つの行爲が連ねられる。行爲主體は問題にならない。(b) は (a) の特例に相當する。ここでは、常に主語[3]が同一でなければならない。卽ち、或る主題に關して前後する一連の動きが接續されるのである。一つの繼續的行爲が前後兩端の動きによつて示されるものである。(c) では、單一の動き[4]が二つの動詞によつて表現されてゐるので、相前後する別の內容はない。慣用的に、時間的前後に準じた前後意識が成立したものであらう。從つて、又、前後入れ換へて接續されることは出來ない。前後入れ換へられて成立したものは後述する (II, C) に屬する。

これらに比べて第二種の分類はどうであらうか。

A a. phan-par smra-ba dkon-pa-*ste*/ de dag las kyaṅ ñan-pa dkon

爲をはかつて言ふのは難しいことだが、それよりも、聽き入れるのは（もつと）むづかしい。

b. khyod ni dpal-*te*/ khyod ni mgo [si-tu]

貴方は（我等の）榮光であり、貴方は（我等の）指導者である。

c. khyod phyogs gcig mthoṅ-*ste* gñis ma mthoṅ

貴方は一面は見える（人だ）が、二面は見えない。

一口に分へば、この場合の接續は、〃一方、……だが、他方、……だ〃に相當する。從つて、(a) のやうな比較のための構文が含まれなければ、前後の文は容易に入れ換へることも出來る。ここには、第一種のやうに前後關係の存在を認定する

働きはないわけである。勿論又、接續助辭とは呼べない。

この(A)類では、辭の前後に配置される文、又は述部（複合したものも含む）の內容には併存的乃至對蹠的意義が見られる。しかしこのやうな關係にあるものが接續されてゐるのみで、この種の關係がこの辭によつて表現せられてゐるのではない。つまり、既存の關係が支へられながら接續が行はれてゐるのにすぎない。從つて、次の類に於いては、別種の關係が同樣に支へられるのである。

B a. ṅa spyir yaṅ yul phyin nas miḥi ṅo ḥdzin mi byed-*de*/ khyad-par rgyal-poḥi ṅo ṅa mi ḥdzin//

私は、普通でも、巷に入つて人づき合ひはしない。で、別して王との交渉も私はしないのだ。

a′. mi-bdag—rab-dghḥ skyes-pa ñid daṅ yid mi-bde skyes-*te*/ brtse-ba las ni mchi-ma rnam gñis byuṅ-ṅo//

王は、喜ばしくもあつたが又、不安でもあつて、いとしいままに、二條の涙を流すのだつた。

b. gaṅ-shig dgaḥ-ba daṅ bral de-ñid ma brjod-*de* /—rtsub-paḥi de-ñid phyir// [Buddhacarita]

何にせよ、不快な眞實は語らなかつた。卽ち、酷薄な眞實だつたからである。

b′. blo-gros mthun-paḥi mi dag-gis/ bya-ba gaṅ yaṅ dkaḥ min-*te*/ chu-man yul-ba gcig drans-pas sa-shiṅ rgya-cher ḥdul la ltos//

すばらしい英知ある人々によれば、どのやうな仕事でもやり遂げられないことはない。一本の用水路をひらいて廣大な田地を開發するのを看よ。

c. dmaḥ-ba dag daṅ ñam chuṅ-bar / bsñas dmad tho-co mi bya-*ste* // rdzin-bu chuṅ-ṅur brgyad-ba-yis/

lus srog bral-ba mañ-du mthoṅ//

賤しい者達や、かよわい者に達して、輕蔑やからかひがなされてはならない。小さな水溜りに氣をとられて生命を失つたと云ふことがよくある。

d. lo[5] gcig-cin rtag-tu dpya dar yug lña khri phul-*te* / rgya dpyaḥ-ḥjal-du bcug-go//

毎年、たへず五萬片の絹が贈られることになり、支那は朝貢を餘儀なくされたのである。

何れも、互に何らかの關係をもつ二つの文が結ばれてゐるものである。二文の間にある關係は、まとめて云ふと、補述文[6]の主部と述部との關係に相當する。三つに分けたが、いづれの場合にも、既存の關係が支へられてゐるばかりで、特定の表現を加へる働きは辭に見られない。

(a) は屬性判斷を示す一般の補述文と相應し、(b) は理由開陳の特殊補述文に、(c') は同一判斷を內容とする發展的補述文に相當する。(b') は (b) の特例で、理由開陳の代りに命令法が來てゐる。(c) は同一判斷をなす文の述部に相當するものが比喩の文で構成されてゐる例である。(a') は補述文の發展的構文と見られる複合述部[7]をもつて主語を說明するものに相應する。(c') も (a') と同樣のものに當る。兩者いづれも、主語の代りに、これに相當する文が來てゐる點で、相應する單文と異つてゐる。前者の主部は原因・理由的な、後者のそれは結果的な意義を有する。對應する複合文[8]との間に充分な關聯を見ることが出來るであらう。

さて、(a), (a') の二構文に於いて、辭に先立つ文が、後れる文に對して、原因・理由的意義を示しても、果して、この辭がその關係を表現するとは考へられないだらうか。このやうな意義が認められるためには、他の第二種の用法はすべて存在してはならないであらう。特に (b), (b') の用法にあつては、全く逆の關係が支へられてゐるのを見ることが出來るからであ

る。又、實際、このやうな原因・理由的な意義を表現して接續を遂げるためには、一般に他の助辭が用ひられてゐる。卽ち bas (pas), nas などがそれである。文がこれらの助辭を伴ひ、原因・理由を表す文要素を裝つて接續的な表現を達成出來るのである。

第一種の場合にも、その關係が積極的に表現されるにはこれらの助辭が用ひられた。この點で、第一種と (a), (a′) の類とは混同される充分な可能性を具へてゐると言へよう。

(b), (b′) では、或事柄に關して、理由をもつて、或は原因によつてはその說明が加へられる。又 (c), (c′) に於いては、具體的事實が示され、その抽象的意義が加へられる。又、前者は後者に對して結果的位置にある內容を示す。この點、(a), (a′) とは、逆の關係に在るものが連ねられることになる。これらの三つの異つた關係を夫ゝ接續出來る辭について、その意義を求めるならば、單に、諸種の關係を損ふことなく支へて接續の働きを示すとしなければならないであらう。

成立について云へば、先にもふれた bas (pas), nas などの助辭が文末の述語に加へられ、理由等を示す文要素を裝ひながら、轉じて接續の働きをも示しえたやうに、ここでは、補述文の主語を支へるものが裝はれながら、接續の機能をもつものに轉じたのがこの辭と云へるであらう。ただ、nas 等は關係的表現を加へる助辭であつたが、この接續辭となつたものは、既存の關係を支へるのみで、如何なる關係的表現も加へるものではなかつたと見られる。

補述文にあつては、同格配置にある一概念語と前置されたより具體的な語との間に思想の分節が表示されるのであるが、その間に於ける思想の分節が既に了解濟みのものとしてその表示を必要としない、いはば、同格配置の語をもつ句と區別するため、或る種の表示を必要とした。一は、述部相當部を抽象化することであり、他は、特定の關係的意義を加へずにこの分節を明らかにするやうな、例へば、强調の助辭 'ni, yan (kyan, ḥań), 複數辭 rnams, dag, 指示代名詞 de 等を主部

の直後に置いてこれを利用するものである。これらの辭は說明されるべき具體的なものに最も屢ゝ伴はれるものである。從つて、主語として一般に抽象的なものに伴はれるときなど、それは、却つて說明されるものとしての位置を保證するのに役立つたであらう。de に至つては、說明されるべき具體的なものを指示するのが本來の働きである。ここに de が主語を支へるものとして採用されうるのを知ることが出來る。

これまでの用例は、二文の接續に當るものが主で、たまたま、述部のみの接續が見られても、主語を共通とした二文の接續に由來する特例であつた。今、さうした意味でなく、述部のみに連つてゐる te 辭を見よう。

C a. dňos-po ni rigs gsum-*ste*/ bem-po daṅ śes-pa daṅ ldan--min ḥdu-byed-do//

現實とは、三態で、物質と精神と有機物である。

チベットの文典家は、この種の構文を「開」と稱する。卽ち、後に說明が展開されるからである。これに對するものとして (B, c') 的構文も含めて「攝」と呼ぶ一群の用法がある。この「開」は主語を共通とする二文と見ることも出來る。その場合の二文の關係は、一見最もよく似てゐる (B, c') とも異つてゐる。この二文は、同一の事柄を綜合的にと分析的にと言ふわけであるが、文自體の間に補述文構成的關係は成立しない。今、rigs gsum と te 辭の後部の概念とが入れ換へられると、「攝」と稱し、(B, c') と同類視するが、これも上述の同じ意義に於いて互に區別されねばならない。その點の明らかな例を見よう。

a'. mi-lus rin chen dkon gsuṅs-*te*/ khyod ḥdra mthoṅ na, dkon rgyu med//

人身(を受けるの)は貴重なことで困難だと云はれるが、汝の如きものが見うけられるからには、困難な筋合もない。

共通主語を配した二文として構成して見ても、如何なる文構成的關係(9)もなく、複文としての接續意義はない。

gsuṅs-te は、實は同格的用法の發展的形態――私は敍述補語とこれを呼んでゐる――が定型化したものと云へるのでなからうか。從つて、或る語に對して常に從屬的位置を占め、その規定を受ける。ただ、その語とは形式的に獨立してゐる。rigs gsum-ste も、全く同樣なものであらう。この方は尙ほ、同格的形跡も留めてゐる。

形式的には獨立してゐるから、自らを規定する語を形式的に拘束することはない。したがつて、助辭を伴つた規定語も見られる。

b. dge-baḥi gdon-gis gshan-mas ni/ smin-maḥi gshu ni rnam bkaṅ-*ste*/—ḥdi-yi spyod la rjes-ḥdon byas//

他の女は―（その顏には）弓なりに眉が描かれて居たが、きれいな顏つきのままこの方の身振りを眞似た。

この定型化した敍述補語を規定するものは gshan-mas「女達は」の gshan-ma「女達」である。ste に支へられるものは複合述語的であつて主體（bdag）の狀態[11]について述べるものである。敍述補語は又、文頭に立つことも出來る。

c. rga daṅ na daṅ ḥchi-ba-*ste*/ gal-te ḥdi gsum ma yod[12] na/ [B. C.]

老と病と死であるが、若しも、この三者がなければ、

これらの定型化してゐないものを見るとしよう。

1. hoṅs nas de la de rnams-kyis/ ya-mtshan rab-rgyas spgan-ma *rnams*/ padmaḥi mdzod ḥdraḥi phyag rnams-kyis/ phyin las yan-dag spyod-pa byas// [B. C.]

近づいてから彼に向ひ、彼（女）等は、驚異にみちた目（をしてゐた）が、蓮華の蕾のやうな掌でもつて、恭敬禮拜するのだつた。

文頭にたつ例。

2. ya-mtshn-gyis ni mig gyo *rnams* bu-med rnams khyo thob bshin/ mi-skyon-sras la mdun du ḥoṅs// [B. C.]

驚異のあまり、目もとも定かならず、乙女達は、花婿を迎へるが如く、王子を迎へに赴くのでした。

3. bdag-gi ñe-bar hoṅs la dgos-pa *gaṅ yin-pa*/ bdag-gi *de* ni gson mdzod—khyed/ [B. C.]

私の來訪した目的とされるものだが、私から（それを）お聽きたまはれ、卿よ。

強調助辭 yaṅ (ḥaṅ, kyaṅ) によつて支へられる場合、同種の構文は反戻の意義に於いて接續をとげる。ni にも似通つた用法があり、ñid は強い反戻の接續に用ひられる。先に引用したものは共に rnams によつて支へられてゐる。他の一例(3)は一見、何ら支へるものが存在しない。又、この敍述補語を規定してゐるものは恰かも指示代名詞 de であるかのやうに見える。然し、さうとすれば、皮相的觀察であると言はなければならぬ。

かねて私は指示代名詞に指されるものを獨立提示格と呼んでゐる。それは常に指示されるためにのみ存在して文の形式的構成には與らないからである。

de は、獨立提示格、或は文に示されなくとも、何らかの指示される具體的なものなしに成立するものではない。

獨立提示格には、de によつて指示されるもの自體を示すものと、指示されるものによつて同格として規定されるもの、即ち指示されるものを說明する敍述補語、それを示すものとの二つがある。(3)は後者の場合である。從つて、指示されるもの自體は文中に示されてゐない。

この場合の de は、この例では特に強調されて使用されてゐるが、一般には、敍述補語である獨立提示格を支へるものと

して働くことが出來るであらう。元來、敍述補語自體を指示しないが、常に、敍述補語の直後にあつて、その規定者を指示するdeは間接的に敍述補語を示すわけでもあるから、敍述補語を支へながら而も思想の分節を明らかにするものとして用ひられても決して不思議ではない。

云ひかへれば、deによつて指示される具體的なものが、同格的敍述、卽ち、敍述補語を從へるか否かに由來して相異つた獨立提示格が出來る。敍述補語を伴はない獨立提示格は、勿論指示されるもの自體である。他の場合にして指示されるものの自體が漠然として適當な詞をもちひられないため略されると、第二の獨立提示格が見られるわけである。この獨立提示格は結局、間接的と云ふ限定を受けて被指示概念となることが出來る。つまり、常に敍述補語として指示を受けるわけである。敍述補語の方から云へば、このdeは自らの位置を却つて支へ保證するものとも見做されるであらう。deは說明されるべき具體的なものに伴はれるのが常であるから、述語に連る關係も同時に保證される結果となるわけである。rnams等についても全く同じ考へ方で整理することが出來る。

ここに引用された例文は散文ではないが、偈頌とてもチベット語の根本的構成から遊離して成立するものではないから、說明の資料としての價値を失はないであらう。

第二種の接續中(A)を支へる辭については、(C, c)を通じて、(A, c)→(A, b)→(A, a)と單に支へられる關係[18]が特定化したものと考へる方が適當であらう。

他方、第二種(B)の用法は、獨立提示格がdeによつて指示されるもの自體である場合、つまり第一の方のdeによつて支へられると考へる。このことは次の節に於いて再び考察するが、何れの用法にせよ、既存の關係が損はれずに、單に支へられるところにこの辭の特性を確認することが出來る。

既に見たやうに第一種の用法と第二種のそれとを比較すると、第一種的用法には、後者に別に前後關係存在の認定的意義が加へられてゐることを知るのである。これは兩者の間にある斷層であり、この用法を支へるには、第二種の辭に或る種の表現機能上の附加を必要としたであらう。

註

(1) Jacque Bacot: Les ślokas grammaticaux de Thonmi Sambhoṭa. Paris, 1928, p. 30 note.

(2) Sarat Candra Das: An introduction to the grammar of the Tibetan language with the texts of Situhi Sum rtags. Darjeeling, 1915.

(3) チベット語では、述語を規定するもののうちで最も重要なものは、「語義だけのもの」miṅ-don-tsam である。以後これを主語とよぶ。助辭を伴ふものは、述語の規定者としては第二義的な價値しかない。例へば、行爲主體を示すものもさうである。それらは miṅ-don-tsam の規定を受けた述語を重ねて規定するからである。(a) では二つの主語が來てゐる。

(4) 「語義だけのもの」miṅ-don-tsam が一般的なものである場合、特に、慣用的表現にあつてはそれは示されない。或事柄が何について起つたかを示す必要がなく、起つた事柄のみをのべる場合も主語は省略されるのが普通である。チベット語に於ける、いはゆる主語は文中に示されない眞の主語の同格語と言へる。

(5) 版本ではないが便宜上引用した。H. E. Richardson: Ancient Historical Edicts at Lhasa, 1952, cf. 本文 IV, Sholの碑文

(6) 補述文と云ふのは、一般に補語とされるものがそのまま述語を構成するから名づけたものである。所謂る係辭は、チベット語では助辭と同樣、抽象化の働きしか示さず、述概念となることはない。チベット語の述部には、專用の述語の他に名詞（所謂る形容詞は存在しない。それはある種の述語が抽象化されて名詞的價値を得たものに過ぎない）が、主語との關聯に於いて、時には抽象化され、時にはそのまま用ひられる。

(7) 複合述部は、主語がもたらした、或は主語が受けた具體的行爲事實をもつて、單に主語を說明するもので、主語が行爲に於いて如何に關與するかを示すものではない。cf. 拙稿 On the Tibetan Syntaxes 大倉山學院紀要 II,

(8) 複合文の主語は、主體的なもの、客體的なもの、原因・理由的なもの、結果的なもの、行爲主體的なもの、行爲受領者的なものがある。cf. 拙稿「譯梵藏文に於ける自動詞文の研究」大倉山學院紀要 I, 前揭拙稿。

(9) 補述文構成的關係を云ふ。然し、文構成的ではないが或る程度の關係がある。同一のことがらを繰り返して云ふ換言的なも

ので、むしろ(II, A, C)に近いものである。

(10) 註(6)に見た補述文の述語を構成するものが、主文の述語としてではなく、從文的な位置にあつて主文の主語の同格として用ひられる。敍述をたすけ、しかもいはゆる補語的なものだからこの名を用ひた。

(11) 敍述補語自體は、同格的なものに由來し、補語的意義に於いて敍述を助けるものだから、動作とか行爲の中に規定者が如何に關與するかをのべるものではない。複合述語も又同樣である。如何なることに關與してゐるかを述べるに過ぎない。

(12) F. Weller, ed. Buddhacarita では yin とあるが、skt. から見ても yod でなくてはならない。

(13) 辭に支へられるものが特定化したとは、主語と敍述補語とが結ぶ關係內容と、同じ主語が述語と共に示す內容とが、併存的、乃至は對蹠的になつた場合を云ふ。

Ⅲ　チベットの文典家による分類と te 辭の起原について

さて、チベットの文典家はどのやうに分類するであらうか。チベットの Pāṇini と云はれる Thonmi Saṁbhoṭa[1] の說を見よう。

la-don su la u pyis nas/ de la gsum-paḥi-daṅ po-sbyar/

la-don の su から u 音が除かれた後、それに第三群の第一文字が著けられ、

de la āli gsum-pa sbyar/ de ni lhag daṅ bcas-paḥo/

それに第三番目の母音が加へられると、それは具餘である。(Sum-cu-pa 13)

ここには、今日一群のものとして連聲によつてのみ區別される te, de についての言及も、暗示もない。別に、同書のうちには次のやうな頌がある。

gaṅ miṅ-gi ni ya-mthaḥ-ru/ gsum-pa la ni e sbyar-ba/

あらゆる語の前にあつて、三番目の（suffix）に e の結びつけられたものは、

tha-sñad dbaṅ-du gsum yin-te/ dṅos-po dbaṅ-du bshi-ru ḥgyur/

限定に關しては三であり、物自體に關しては四になり、

dus-kyi dbaṅ-du gñis yin-no// (Sum-cu-pa 20)

時間に關しては二つである。

この中に指示される一用法が「具餘」[2]であるとされる。それは Si-tuḥi[3] sum-rtags（Situ の三十頌と性入法）の中に引用される sgra-baḥi[4] sgo（言語の門）の文によつて示される。

de shes bya-baḥi tshig-gi don/ tha-sñad dṅos daṅ dus ḥjug gsum/ ḥdas daṅ rnam-graṅs gshan can daṅ/

de と云ふ語の意義は、限定と物其者と時とを示す三つである。〝去つたもの〟と〝他の部類に屬するもの〟と

lhag-ma daṅ bcas-paḥo//……

〝殘すところあるもの〟とである。

最終行にある記述は、Sum-cu-pa 13 頌の lhag-ma dag daṅ bcas-pa 卽ち「具餘」と同じものを示す。

この記述を適當に處理してしまふことはやや安易に過ぎる態度であらう。「言語の門」は十二・三世紀の著述と言ふことになるが、このことは根據なくして無意味に述べられたわけでもないであらう。既に、この頃では今日と同樣、これらの接續辭は表記法上の區別をもつてゐない。從つて、ここに「具餘」として述べるやうな用法的背景はなく、實際は必要のない記述だつたものである。然るに、このやうなことが述べられてゐるとすれば、何か有力な傳統によつて、相當する用法の何たるかを辯じえないままにも記載を餘儀なくされたのではないかと思ふ。今日、その箇所に連聲によつて限定された de の

みを擧げてあるのを見てただ頭を傾けることこそ無意味なことでしかないかも知れない。

同書が第十三頌について言ふところを見よう。

ste ni lhag-ma yod-pa-ste/

ste とは〝殘すところあるもの〟にして

mtshams-sbyor-ba daṅ daṁ-bcaḥ daṅ/[5]

〝接したるを續けること〟と〝定言〟と

gsḥaṇ ḥdren-pa daṅ gsum-du ḥdod/[6]

〝他を引くこと〟との三つに用ひる

byed daṅ bya-baḥaṁ yaṅ na ni/[7]

〝作〟と〝所作〟或は又

bya-ba ñid du sbyor-ba gaṅ/[8]

すべて所作自體に結びつけるものなら何にあれ

tshig gñis rim-mam dus gcig-tu/

（さうしたものを示す）二語を順次又は同時として

sbyor-bar byed-pa mtshams-sbyor yin/

接續させるのが〝接したるを續ける〟である。

gaṅ shig-gi ni sṅa-ma la/

何かあることについてあらかじめ（のべた）ことに對し

gsal-bar byed-pa dam bcaḥ-ba/

明瞭にするところのあるのが〝定言〟である。

lhag-ma yod tsam ston ḥgyur-shiṅ/

〝殘すところがある〟とだけ示しながら、

de las gshan gyur gshan-ḥdren-paḥo/

(9) それから外れてゐるのが〝他を引くこと〟である。

これらに相當するとして Situ が引用する例を見よう。〝接するを結びつける〟――(10)前の語を〝作〟に後のものを〝所作〟に關與させて〝もたらす〟と〝もたらされる〟を順にならべるもの。

イ　mdaḥ ḥphaṅs-te phog

矢が放たれて的中する。

lha bsgrubs-te grub

神想觀を實踐して成滿する。

(11) 前後二つのものを〝所作〟に關與させつつ次第を追つてならべること。（二つの行爲を順に並べること）

ロ　（I, a に同じ）

phyags ḥtshal-te bśad

（彼が）禮拜して（法が）說かれる

それ自體（同一所作）に屬して時の前後がないもの。[12]

ハ ḥdzum mul-te mdaṅs pyuṅ

笑つて相好をくづす

ḥphur te ḥgro

飛んでゆく

〃定言〃[13]

ニ　（II, C, a に同じ）

ホ rtag-pa yin-te yod-pa gaṅ shig ḥdus-byas ma yin-paḥi phyir

常住なるものである。卽ち、何か存在するものを集めたのではないから。

ヘ saṅs-rgyas-te ma rig-paḥi gñid saṅs-pa daṅ śes-bya la blo-gros rgyas-paḥo

佛である。卽ち、無明の眠から覺めたるものであり、所知に對して慧が增長せるものである。

ト bslab-pa kun-kyi gshi ḥdzin cin/ shes gsuṅs-te/ bslab-pa ni lhag-pa tshal-khrim daṅ lhag-pa bsam-gtan daṅ lhag-pa śes-rab-kyi bslab-pa gsum-du naṅ pa la grags pa daṅ/ phyi ral-pa laḥam tshans-par spyod-paḥi brtul-shugs-kyi bslab-pa maṅ du hbyuṅ-bas shes sogs rim-par sbyar-bar byaḥo/

「あらゆる學道の根底をなし」と說かれてゐるが、學道とは、內部のものには戒と定と慧の三學道ありと云はれ、又外部のものにも淸淨行の在り方と云つた學道が夥しくあるから、色々のことが順次に遂げられなくてはならない。

〃他[14]をひく〃

チ　śar-kyi phyog na dbaṅ-po-ste/ lhaṅi phyog na ḥchi-bdag go

東方にインドラあり、南方にヤマあり。

リ　(II, A, b に同じ)

以上は、チベットの文典家による代表的見解と見なされてよい。これらを前節の分類に照合して見る。

イ、(I, b) ロ、(I, a) ハ、(I, c) ニ、(II, C, a) ホ、(II, B, b) ヘ、(II, C, a) ト、(II, B, a') チ、(II, A, a) リ、(II, A, b)

殆んどすべてが示されてゐるが、前節でも述べたやうに (II, B, c') と (II, C, a) とは區別されてゐない。

さて、Situ は de と ste とをどのやうに扱つたであらうか。彼は、連聲法副によつて ste, te, de を區別するのみであつて、勿論、それは今日一般に言ふところと變らない。ただ、「言語の門」とその注釋には de が「具餘」に用ひられるとある旨に言及してゐる。又、指示代名詞 de の項には「言語の門」の（前掲）文を引用してゐる。

彼は、連聲によつて ste から te が、更に de が出來たと說明する。又、最近の學者もこの說を肯定[15]してゐるやうである。その他の文法的著作[16]にあつても、三者は一群として扱はれることに根本的相異がない。

然し、「言語の門」でも、Situ でも mtshams-sbyor 〃接するを續ける〃 の項を設け、第一種を用法の一つとしては區別する。この項に屬する用法は、時間的に相接するものを連ねる點で、彼等の分類にあつても、極めて明瞭な特色をなしてゐる。然し、一群の辭にまつはる一用法とするを出ない。これは、區別した用法的背景を既に失つてゐた彼等にとつて、或は當然の處理だつたかも知れない。事實、時には、第一種と第二種のある用法は全く相似して居り、共に、助辭 bas[17] (pas), nas によつて置き換へることが出來る。實例を見よう。

1. sa sa mal mal na bag brkyan ste// bde-bar ḥkhod// skyid-paḥi bkaḥ drin ni rabs khriḥi rab-du-thob//
どの土地、どの場所でも不安が除かれて幸福な生活が出來、有難い惠みが多くの人々に得られる。

2. yan cad ni bod-kyis phu dud bya ste// dbon shan ñe shin gñen-paḥi tshul bshin-du// sri shu daṅ bkur stiḥi lugs yod-par sbyar te// (何れも唐蕃會盟碑)
それよりこちらではチベット人が敬意を拂ふべきで、近くも親しい姻戚のやり方にふさはしく敬禮や挨拶をする習慣があつてよいので

先の例には、時間の前後があつて (I, b) に相當する。相前後する一連の動きが語られる。これに對し、後の例には、抽象的な理由と具體的當爲とが連ねられ、その間に何ら繼起的な時間の關係は含まれてゐない。

然し、それにも不拘、チベット語では共に原因、理由的な意義が辭の先に述べられるものとして一括することも出來る。ここに、後節で言ふ analogy が成立する所以もあると思はれる。又、

ḥphur-te ḥgro
飛んで行く
phyir loy-ste glin yul la saṅ
ひきかえして glin 國に去る。

前者は (I. c) 後者は (II, C, a) に夫々相當する。共に二つの動詞をもつて一つの行爲をのべる。いづれも「同時」のことである。後者から glin yul la を除いたら、ます〳〵區別は困難にならう。

前例では、ḥphur-te 〝飛んで〟を除けば、表現の意圖は崩れてしまふ。而るに、後の場合、さうはならない。phyir

log-ste〝引きかへして〟とは「去る」事が主語に對してもつ意義を主語に對する說明として加へたものだからである。

これは、たま〳〵、定型的敍述補語が、本文の述部とは、(I, c) とまぎらはしい關係に立つたからである。敍述補語の名が示すやうに、この辭に支へられる述語は同格的用法の發展的なものであるから、直接動作を示すのには用ひられない。この點、第一種はむしろ逆である。

最も一般的な相似は (II, B, a') と (I, a, b) との間に見られる。この間の相似については、〝前後的〟なものと〝因果的〟なものとを共通の關聯として處理するチベット人が、用法の混同をひき起したと考へてもよいであらう。

然し、それはやはり混同であつて、このやうな處理は正確ではない。nas, bas (pas), のやうに〝前後的〟なものと〝因果的〟なものとを積極的に表現する助辭は、元來、それらを未分の具體的關聯として示したものから、〝時間的〟と〝關係的〟なものとに分けられたのである。既に抽象的關聯としては區別があつて共通ではない。

ひるがへつて接續辭 ste, te, de を見るに、このやうな特定の關係を積極的に表現する働きは全くない。ただ、第一種の用法に於いては、時間的前後關係の存在を認定する働きが見られた。第二種にまとめられる用法にはそれすらもなく、既存の關係が支へられて單に接續のみが行はれる。既存の關係には〝因果的〟評價を許すものもあつた。然し、それは特定の補述文的構成から常に引き出せるものに過ぎない。補述文構成的關係にして全く逆な場合を支へる用法も存在することが忘れられてはならない。第二種の接續辭は、先程見た助辭のやうな積極的に特定の關係を表現するものでないから、第一種的用法を得るためには、必ず前後關係存在の認定をするやうな働きの附加を必要としたであらう。それは補述文的構成から施すことなくて決して引き出せないものだからである。

今、第一種の用法と第二種 (B) の用法とが一緒に、他の用法から區別されて、「時間」と「關係」とについて未分のまま、

その共通の働きを示すものの附加を受けてゐたとするなら、先づ今日のやうな表記法上の區別喪失はなかつたであらう。とすれば、この問題も又取り上げられる必要を見なかつたに違ひない。

さて、先にも述べたやうに、チベットの文典家は、指示代名詞の項に於いて「具餘」の用法があることを再説する。「三十頌」(sum-cu-pa)では「限定に關しては三種ある」として、別に「具餘」と云つてゐるわけではない。が、「言語の門」の著者は單に連聲によつて區別されるだけのものを、ことさら指示代名詞のうちに分類したのであらうか。いや、多分、「具餘」は「限定」の三用法に含まれるとの傳統があつたに違ひない。或は Thonmi Sambhoṭa に由來する傳統であつたかも知れない。すると、その「具餘」は指示代名詞 de の一用法でなければならない。「三十頌」では、明らかに「あらゆる語の前にあつて」と言つてゐるからである。

「具餘」の働きは果して指示代名詞の用法中に見ることが出來ないであらうか。ここに問題の「鍵」があると思はれる。

先づ指示代名詞 de が「それ」と云ふ指示代名詞のいはば本流的意義に拘泥するものかどうかを見よう。つまり、今日の接續辭に轉化する可能性があるかと云ふことである。あるとすれば、Thonmi は轉化以前のものを認めてゐたとしなければならないであらう。若し、轉化の可能性がなければ、ここに取り上げるには及ばない。單に、指示代名詞のみの問題となるからである。

de khyod-kyis bos-paḥi mgon-po *de* min-nam

その方は、君が招待した當の客人ではないか。

(客人、そのものではないか)

dad-ldan raṅ-bshin bzaṅ-po *dər*/ tshigs-bcad gcig tsam-gyis kyaṅ phan// rkaṅ-mthun gsar-baḥi myu-

gu *de*/ chu tshar-gzegs-ma yis kyaṅ ḥphel//

信心深く性もよろしいやうな方には、ただの一句でも益するところがある。新しい穗草の芽なども、ただ一滴の水をもつてしても成長（に資）するところがあるものだ。

（よろしい者――それには。芽――それは。）

尙ほ、代名詞的でありうる。然し、遠稱的意義は薄い。

ston-paḥan *de* saṅs-rgyas kyaṅ *de* de bshin gśegs-paḥaṅ *de* yin-no

師でも又あり、佛でも又あり、如來でも又あるのです。

このやうな用ひ方では、完全に强調的意義しか認められない。云ひ換へることによつて單に强調するだけである。前節でものべたが、獨立提示格と指示代名詞とがこのやうな表現形式をつくるので、いはゆる代名形容詞などは存在しない。指示されるものが抽象的意義を有すれば有する程、一般に遠稱的意義、卽ち具體的意義はうすくなる。この用法のものを代名形容詞と誤り呼んでゐるのに過ぎない。のみならず、かなり具體的な被指示內容をもつ場合にまでその誤り呼ぶことを繰り返すのは解せないところである。

我々は、獨立提示格に與へられる意義によつて指示代名詞の意義に變化がもたらされることを知つた。文法家の規定[16]に反して具體的位置をもたないものも指示されうるのである。然し、文法家はその物合を「具餘」に含めてゐたのならば、別である。我々はそれが辭に轉化する可能性を認めてよいであらう。

mi ñen-pa la kha-ta byed-pa *de*/ gyoṅ-poḥi śiṅ la mdud-pa rgyab-pa ḥdra/

聽き入れないものに忠告することなど、たくましい木に結び目をつくるやうなものだ。

名詞化された述語の後に來て句末に位置をとる。(II, B, c) の用法と異るところは連聲がないだけである。

bdag-gis smras-pa gaṅ de tha-tshom med-pa *de/* mi-skyoṅ kyed-kyi blo-gros gshan ma gyur cig/[B. C.]

私の述べましたやうなことからは疑ひないことであります。(だから) 王よ、貴方の御心を動搖なさいませんやうに。

これは (II, B, a') に相當する。この指示代名詞と後の文とは、發展的な複合補述文を構成しうる。然も de は句末にある。連聲なき接續辭としなければならぬ。

chu-bo gtin tshad rin-thuṅ *de/* chu-dkyil ma slebs śes mi yon/

河底の程は、深いも淺いも、中流に達しなければ、知りやうがない。

(II, C, a) に相當する。前節の終りに見たものより、更に現行の定型的敍述補語に近い形をとつてゐる。單に連聲がないだけの相違である。

de が指示すべきものは chu-bo gtiṅ tshad "河底の程" であり、rin-thuṅ "深淺" (深さ) は "河底の程" の敍述補語である。然し、實際は、敍述補語を含めたものを指し、指示されるべきもの、卽ち "河底の程" のやうな文の主語が略される場合——非常によくある。例へば、述語を規定すべき主語が一般的なときなど——敍述補語を認定するためにあるかのやうになる。まして、本來 de によつて指示されるものが漠然として具體的意義を持たない場合、この傾向は著しくなるわけである。敍述補語自體の價値は、主語の概念內容よりも抽象的であるが、それは、主語の示す概念內容を自らの示すより具體的な概念內容に位置づける表現的價値をも伴ふからである。從つて、そこから分析出來る概念內容そのものは却つて具體的でありうる。つまり、元來、指示代名詞は具體的なものを指示するのが常であつたらうから、殊に、形式的に主語が缺ける場合、この敍述補語に含まれる概念內容をそれに代へて指示されるものであるかのやうに見做すのは當然のなりゆきで

あらう。だからこそ、獨立提示格としては眞の被指示概念そのものでないものも又成立するのである。つまり、指示代名詞は「敍述補語」を指すものにもなるわけである。

かくて實際にも、敍述補語が獨立提示格を構成する場合、指示代名詞は敍述補語の表現的價値も含めた抽象的內容を指示するものになる。その結果、主語そのものを指すときよりも更に抽象的なものを指示することになる。

さて、他の場合、卽ち、獨立提示格が指示されるもの自體のとき、事情は頗る簡單に理解される。指示されるものは常に文を抽象化した句である。指示代名詞はそれを抽象的事實として取り上げるわけになる。ここに於いて指示代名詞自體はどのやうな意義を帶びるか明らかにならう。

具體的なものを指示しなくなつた指示代名詞は單に强調的な意義しか示さない。つまり、常に附屬的指示を行ふのである。然る後、この de は、殊更に名詞化された形をまつまでもなく、文そのものの形に接して同じ働きを示すことが出來よう。引用された文では、de は尙ほ獨立した詞としての地位を保つてゐるが、既に句末にあつて Thonmi Sambhoṭa の或は云ふところの「具餘」の働きを示してゐる。これらがやがて獨立の存在意義を失つて附屬的價値しかもたないものとなることは容易に推測出來る。文典家の傳統は虛僞でも誤りでもなかつたわけである。

以上を要するに、指示代名詞から接續辭の de が成立し、他方、第一種の用法のために、時間的前後の關係が存在することを認定するある種の附加を受けた辭がこれらと別に出來たと考へる。Jacque Bacot[17] 氏の言はれるやうな sa, su を附加的要因として成立したのかも知れない。兎に角、s 音に先立たれた de が別にあつたものであらう。そして、多分 sde から s-te, ste となつたに違ひない。これも又、de と同じく、成立の當初には連聲はなかつたと思はれるのである。

註

(1) Thonmi Sambhoṭa は Sron Brtsan Sgam Po 王 (A. D. 5692～650) の大臣で、印度に派遣され、文法學を學んで歸り、チベット文學を制定し八部の文法綱要を著したと云はれる。然し、今日見られるものは二部 (luṅ-du ston-paḥirta-ba sumcu pa, luṅ-du ston-pa rtags-kyi ḥjug-pa) のみである。恐らく八部と云ふのも Pāṇini の Aṣṭādhyāyī に擬して後に言はれたことで、最初から二部しかなかつたのであらう。稻葉正就「チベット語古典文法」にくわしい解說がある。

(2) 「具餘」とは殘すところがあつて文が完結してゐないことを言ふ。今日の接續の義である。

(3) この著作はチベット文法の權威とされるものである。前揭稻葉氏著書參照。

(4) Sa-skya Paṇḍita Kun-dgaḥ Rgyal mtshan の作とされる。前揭稻葉氏著書參照。

(5) mtshams-sbyor "接したるを續ける" は今日の「接續」と同義ではない。

(6) gshan「他」は無關係の他ではない。文構成的關係はないまでも、對蹠的、併存的意義に於いて關係を有する「他」である。

(7) 單に byed pa「作」卽ち因、bya ba「所作」卽ち果とするのは適當でない。同一主題 (subjective or objective nominative) について繼起する一連の動作を云ふ。行爲としては一つのものであるが、間に「持續」がある場合である。始めの「動き初め」には agent が働き、終りの「動き止み」には agent は既に直接の關與がなく、「動き」自體によつてもたらされるものが殘るとの意味である。

(8) 「所作自體」とは對象として抽象的に取上げられる動作自體を云ふ。「に結びつけるもの」とは行動主體或は對象をそれに結びつけるもので具體的動作を云ふ。
Si-tu 註に de-ñid la とあるのは bya-ba ñid を云ふもので、bya-ba と ñid とをここで分けて讀むことは出來ない。

(9) "それから" の "それ" は Situ の註によれば、他の二用法の意味である。gshan ḥdren の gshan と de las gshan の gshan を關係づけて讀めぬこともない。

(10) tshig sña-ma byed-pa daṅ phyi-ma bya-bar sbyor-bas dren-byed daṅ ḥdren-bya dus rim-par ḥjug-pa shig.

(11) sña phyi gñis-ka bya-bar sbyor-shiṅ dus rim-gyis ḥjug-pa shig

(12) de ñid la dus sña phyi med-pa shig

(13) 「定言」と云ふのは「定義」をもつた前の語、それを說明、或は言ひ盡すために後の語を引くのであつて、分類されたものを引くのと、議論を引くのと、(槪念の既に) はつきりしたものを引くのと、說明するものを引くのと等、內譯は夥しくなる。(Situ p. 20 l. 18)

(14) "他を引く" は "接したるを續ける" と "定言" の二つに屬しないもので、"殘すところあること" だけを示す他の辭であ

つて (Situ p. 20 l. 24)

(15) Jacque Bacot: Śiokos grammaticaux de Thonmi Sambhoṭa p. 28 note (2).
稲葉正就「チベット語古典文法」p. 209.

(16) 「言語の門」(Situ p. 27, l. 16) で云ふところは、sum cu-pa 二十偈の註であるが、すべて具體的なものを被指示體と考へてゐる。
稲葉正就「チベット語古典文法」p. 209〜210.

(17) このやうであつてこれらは nas, cin などの助辭をもつて示してもよい」(Situ p. 20, l. 18) と第一種用法について、代りに nas (I. a) (I. b, c) を用ひうるとしてゐる。
註 15 (Jacque Bacot). 參照

Ⅳ 古碑文等に見られる表記法と用法上の區別

我々が前節から得た結論は、連聲なしに接續の働きを示す二種の辭の存在であつた。一は de であり、他は ste である。これらはいづれも、その附屬的意義が言語の話手に意識せられるに及んで、連聲を生じたのであらう。

資料を求めてこの問題を見よう。

第一に擧げられるのは Khri Sroṅ Lde Brtsan 王の詔敕(1)である。この詔敕は表記法から判斷すると、書寫の年代は割に新しいと思はれる。例へば否定の myi は mi となつてゐる。表記法の安易に改められるところは改變し、逆に、今日見ることの出來ない、どちらかと云へば突飛なものは、そのまま保存されたのではないかと思はれる。

從つて、資料としての價値は必ずしも充分ではない。詔敕は三つある。

今、ste の接續を見ると

First Edict:

1. che ste, 2. mdzad ste, 3. grol ste, 4. btab ste, 5. btab ste

Second Edict:

1, byuṅ ste, 2. thogs ste

Third Edict:

1. che ste, 2. chud ste, 3. bśig ste 4. gyurd ste, 5. mdzad ste, 6. dṅoḥ ste, 7. sbyard ste, 8. por ste, 9. bor ste, 10. ruṅ ste, 11. bcad ste, 12. btsud ste, 13. ruṅ ste

今、-s te の回數を見ると、

First E. 7回、Second E. 10回、Third E. 11回である。他の碑文などの表記法から見ても、これらの -ste 中には -s ste が含まれてゐると考へられる。-s ste は僅か一回 Second E. に現れる。-s に限つて ste の接續が少いわけはなく、後の表記法による改變があつたと見られる。同樣に che ste, btab ste, byuṅ ste, bśig ste, dṅoḥ ste, ruṅ ste, 中には -s te から ste に改められたものが含まれる。che ste, ruṅ ste は確實にその類である。

First E. の (2), Second E. の (2), Third E. の (3), (4), (6), (7), (8) (10), (11) は今日では見られない形である。從つて、ste は、-r, -l, -d, =d(yaṅ ḥjug) =s(yaṅ ḥjug) と -ḥ, -g, -ṅ, -b に連る。多分、-s, -n, -m にも連つたであらう。

他方、de はどうであつたらうか。勿論、發生は ste よりも早かつたから、先に連聲を起しえたと考へることも出來よう。その連聲は、古くは多くの語が伴つてゐた yaṅ ḥjug =s, =d によつて起されたと起へられる。yaṅ ḥjug =d は實際には t の價値をもつたと思はれるから、=s de→=s te, と同樣=(t) de→=(t) te と、de は te になつたであらう。-s, te の型を除いて擧げて見よう。

First E. ; btsug te,

Second E. ; 1. ṅan te, 2. smind te, 3. ḥgyur te, 4. mdzad te.

Third E. ; 1. che te, 2. bskar te.

ここに che te が見られる。從つて、先の che ste は ches te の ches から落とした -s が ste を伴ふ型に analogy されて返り喉いたものではないかと見られる。尤も、これは後の表記法によつて改變された結果で、元來は ches te とあつたに違ひない。

さて First E. では -s te 7回と合せて8回、これに對して ste は5回、Second E. では -s te 10回と合せて14回、ste は僅かに2回しか見られない。從つてここでは、先に述べたやうに -s te には -s ste も含まれると見るべきであらう。

Third E. では -s te 11回と合せて13回である。

見られる形は、-s te, =s te, -d te, =d te, -n te, -r te, -g te である。-g ste と -g te との共在、又、先述の che ste, ruṅ ste から考へられる ches te, ruṅs te によつて、-gs te, -ṅs te, -bs te, -ms te 等があつて、それから =s の落ちた -g te, -ṅ te, -b te, -m te も存しえたと考へられる。ただ -d de の例が見あたらないのはものたりない。この現象は、或は、yaṅ ḥjug のあとで一應 te となつた接續辭が、rjes ḥjug -d のあとで再び de となつたとも解せられる。それは rjes ḥjug の d は yaṅ ḥjug =d の特例とも考へられるからである。

以上は、必ずしも確實な結論をもたらさないとしても、一應、二種の接續辭の共在を妨げない資料と言へるであらう。

次に、我々は二つの碑文について、より確實な裏づけを得よう。

二つの碑文の一は Lhasa の Potala 宮の南にある敕撰の碑文で Shol[2] rdo-riṅ「Shol の石柱」と呼ばれるものである。

これはKhri Sroṅ Lde Brtsan 王の治世下で最後から二番目に大臣をつとめた Stag Sgra Klu Khoṅ の顯彰碑で、他の一つは有名な唐蕃會盟碑[3]である。この二つは、後者が今日の表記法と近く、連聲關係も全く同一であるのに、僅か半世紀位しか先立たぬと見られる前者は可成りの相異を見せてゐる。從つて前者の te 辭に關する用法は全部原文をあげて譯出したが、後者は割愛した。

Shol rdo-riṅ

East Inscription.

○ bloṅ stag sgra klu khoṅ/ nan-blon chen-po daṅ yo gal [ḥchos]pa chen-por/ bka[ḥ]-stsald-kyis kyaṅ bkaḥ-luṅ daṅ [ḥ]dra-bar/ rje-blas dkaḥ dgu ñamsu blans *te*[ヽ] phyi naṅ gñis-gyi chab-srid kab so [ru] dpend-pa daṅ che chuṅ gñis la dra[ṅ]-shiṅ sñoms *te*[ロ]/ bod mgo nag-poḥi srid la phan-ba legs// dgu byas so///

大臣 Stag Sgra Klu Khoṅ は內大臣及び大 Yo Gal Hchos Pa として、敕命を奉じても敕命に相應して、困難多大の宮中の職事に肝膽をくだき、(他方) 內外二つの統治はいづれにも益し、又、大小二つの事に〔當つても〕正しく且つ公平を期した。卽ち、黑頭チベット國に益せる事すぐれ勞多大なり。

上記の te は何れも、-s te で、用法上（イ）は (II, A a) に、（ロ）は (II, B, c) に夫々相當する。

South Inscription.

○ ḥbal ldoṅ tsab daṅ/ laṅ myes zigs/ blon-po chen-pho, byed-byed-pa las/ glo-ba riṅs nas/// btsan-pho yab khri lde gtsug stsan-gyi sku la dard *te*/ (イ) dguṅ-du gśegs so///

Ḥbal Ldoṅ Tsab と Laṅ Myes Zigs とは大臣であつたが、策を弄して敵對したので、父王 Khri Lde Gtsug Rtsan の御身にわざはひして、天にみまかりたまふた。

(イ) は (I, a)

○ hlu khoṅ gis/ ḥbal daṅ/ laṅ glo-ba riṅs-paḥi gtan gtsigs// btsan-pho sras khri sroṅ lde brtsan-kyi sñan-du gsold nas ḥbal daṅ/ laṅ glo-ba riṅs bden-par gyurd *te*/ (ロ) khoṅ ta ni bkyon phab *ste* (ハ) klu khoṅ glo-ba ñeḥo

Klu Khoṅ は Ḥbal と Laṅ が敵對の相談をしてゐるのを王息 Khri Sroṅ Lde Brtsan のお耳に入れたので、Ḥbal と Laṅ が敵對してゐるのはまぎれもないこととなつて彼等は嚴罰に處せられることとなり、一方 Klu Khoṅ は信任を得たのである。

(ロ) は (I, a) (ハ) は (II, A, a)

○ ṅan lam klu khoṅ glo-ba ñe la bkaḥ-gros che nas/ thugs brtand *te*// (ニ) naṅ-blon bkaḥ la gtogs-pas bcug nas

Ṇan Lam Klu Khoṅ は信任を得る一方、忠告するところも大きいところから、勿論忠操も堅固であつたが、內大臣に任命せられたのゐ。

(ニ) は多分 (II, C, a')

○ rgya las mnaṅs phal [sa] che bcad-pas/ rgya spa goṅ *ste*(ホ)// rgyaḥi kha [ms]-su [gta] gs-pa dbyar mo thaṅ/…… na daṅ/ tsoṅ ka phyogs [pa]……ṅa pho gcald.

支那から好むにまかせて領土が奪はれるので、支那は怖れをなして、支那に屬するところ、Dbyar Mo Thaṅ……と Tsoṅ Ka 方面のものを……味方を分散した。

(ホ) は (I, b)

○ btsan-pho khri sroṅ lde brtsan thugs sgam laḥa/ [bkaḥ]-gros-gyi rgya-che-bas/ chab-srid gar mdzad do coḡ duḥaṅ legs *ste*(イ)/ rgyaḥi khams-su gtags-paḥi yul daṅ mkhar maṅ-po bcom *steb*(ヘ) sdus nas// rkya-rje heḥu ḥki waṅ te rje blon sgrag *ste*(チ)/ lo cig cin rtag-du dpya dar yug ḥa khri phul *te*(リ)/rgya dpyaḥ-ḥjal-tu bcug go///

Khri Sron Lde Brtsan 王が英慮をめぐらしたまふとき、(彼の) 忠告が偉大であつたため、御治策が如何にめぐらされても、すべて宜しきにかなひ、支那國に屬する地域と要塞との多くが制壓されて統御されたので、支那王 Heḥu Hki Waṅ Te とその大臣とを怖れしめて、毎年缺かさずに絹布五萬片が贈られる事になつた。卽ち、支那は朝貢させられたのである。

(イ) は (I, a), (ト) は (I, b), (チ) は (I, a), (リ) は (II, B, c')

○ deḥi ḥog du/ rgya-rje yab heḥu ḥki waṅ te groṅs *ste*(ヌ) rgya-rje sras waṅ pen waṅ rgyal-por shugs nas/ bod la dpyaḥ-ḥjel-du ma ruṅ *ste*// btsan-pho thugs sñuṅ-baḥi tshe

その後にあつて、支那王父 Heḥu Ḥki Waṅ Te がみまかつて支那王息 Waṅ Pen Waṅ が王位についたので、チベ

ットに對する朝貢に忠實でなくて、王が宸襟をなやましたまふとき。

（ヌ）は（I, a),（ル）は（II, B, a'）

ɔ ken śir draṅ-baḥi dmak dpon chen-por// shan mchims rgyal rgyal zigs śu theṅ dan// bloṅ stag sgra klu khoṅ gñis/ bkaḥ-stsald *te* keṅ śir draṅs nas// ciḥu cir-gyi rab-ṅogs-su rgya daṅ thab-mo chen-pho byas *te*/ bod gyis gyul bzlog nas// rgya maṅ-po btuṅs-pas// rgya-rje kwaṅ peṅ waṅ yaṅ/ keṅ śiḥi mkhar nas byuṅ *ste* ḥo/ sśem ciḥur bros nas/ keṅ śi phab *ste* rgya-rjeḥi naṅ-blon ḥgyeḥu **in keṅ las stsogs *te* doṅ kwan dṅa bo kan ya……

Ken Śi に進駐する軍隊の大將に Shan Mchims Rgyal Rgyal Zigs Śu Theṅ と Bloṅ Stag Sgra Klu Khoṅ の二人が任命せられて Keṅ Śi に（軍を）すすめた後、Ciḥu Cir の河畔で支那（軍）と大會（勝）戰が演じられた。即ち、チベット（軍）によつて敵は覆滅されたものである。多くの支那兵が殺されたので支那王 Kwan Peṅ Waṅ も Keṅ Śi の要塞からのがれて Śsen Cihu に走つたので Keṅ Śi は陷落して支那王の內大臣 Ḥgyeḥu **in Keṅ などであるが、Doṅ Kwan と Bo Kan Ya……

（ヲ）は（I, a),（ワ）は（II, B, b),（カ）は（I, b),（ヨ）は（I, a),（タ）は（II, C, c)

o srid phugsu/ [gra]-ba daṅ gta[m] [yun-du] sñand-par byas *te*/ klu khoṅ glo-ba ñe shiṅ chab-srid la [dpen]d-pahi [sems] dkaḥ-ba byas so

生涯の果には名聲と評判とを周知のものとした。即ち、Klu Khoṅ は信任を得つつ、治策に益するといふ易からざる心がけがあつたのである。

（ソ）は (II, B, b')

North Inscription.

o btsan-pho khri sroṅ lde brtsan-gyi sha sṅa nas dbu sñuṅ gnaṅ *ste*(ソ)/——/du stsal phar gnaṅ ṅo——las stsogs *te*(ソ) dbaṅ ṅo cog/ blar myi bshes,

Khri Sroṅ Lde Brtsan 王御自ら御承諾が與へられて、——と敕し給へり——などにして所有物たるものはすべて再び奪はれず、

（ソ）は (II, B, c),（ツ）は (II, C, c')

以上に用ひられたものを (I) と (II) とに分けて、その接續の様子を見よう。

(I) dard te, gyurd te, goṅ ste, legs ste, bcom ste, sgrag ste, grons ste, stsald te, byuṅ steḥ, phab ste,

(II) blans te, sñoms te, *phab ste*, brtand te, phul te, *ruṅ ste*, byas te, stsogs te, byas te, *gnaṅ ste*, stsogs te,

(I) (II) ともに te, ste が來てゐる。この他、接續の意味が不明で擧げなかつたが、-d de と云ふのもここには存在する。

上に見られる所で、確實に區別のあるのは -s te と -s ste の形である。前者は (I) にのみ、後者は (II) にのみ用ひられてゐる。(II) に於いて ste の用ひられてゐるのは、phab ste, ruṅ ste, gnaṅ ste であり、これらの動詞は yaṅ ḥjug(4)——但し、必ずしも時を表すものではない——=s が落ちたものである。本來、さう云つた意味から云へば、先にもふれてお

いたがこの用法では phab te, ruṅ te, gnaṅ te となるべきものである。從つて、これについては (I) の形への analogy と云う事がやはり考へられねばならない。用法についてはすぐ後（九世紀初頭）に混用が起つてゐることでもあるから、前節にのべた理由によつてanalogy を起すとするには、失はれた =s と共に、因と云ひ、緣と云ひ、揃つて而も充分であつたやうに思はれる。從つて yaṅ ḥjug の失はれた -ṅ, -g, -m, -b に接する ste は、[5] -ṅ(s) ste, -g(s) ste, -m(s) ste, -b(s) ste の (I) に屬するものと、[6] -ṅ [s]te, -g [s]te, -m [s]te, -b [s]te の (II) に屬するものとに分けられるであらう。

次に、(I) と (II) に同じ形を持つのは =d teである。=d を缺いて -n, -r, -l に連るものは見られない。ただ -d のあとには de が來てゐる。この形を =d te と一つにまとめて見ると ste 及び ([s]) te に對應する二つのものが含まれると考へる事ができる。-d de についてはやはり -d te,→-d de と成立したやうに考へられる。

=d, te は元來 (II) の接し方を示すものであつて、この際の =d は辭の働きとは如何なる關係もない動詞の、[4] yaṅ ḥjug であると考へられる。それでは (I) としての =d te はどの樣にして成立したであらうか。

先の Khri Sroṅ Lde Brtsan の Edict では (I) を示すものとして =d ste, -d ste を見た。その信憑性は疑はしいが、このものから (I) の =d te, -d de が成立したと Si-tu や學者の云ふやうに考へる事も出來る。

然し、次の樣にも考へられる。それは今日見られる樣な「時」の先行性を示すものとして、=s と殆んど同樣の [7] da-drag、つまり =d が他方に成立しかけてゐて、それが、(I) の ste に對應した =d te を作り上げさせたのではあるまいか。全く新たに=d te を創造したわけではなく、既に存在する (II) の =d te に (I) の働きも擔はせて =d te が成立したとするのである。つまり、(II) の ste の成立とはむしろ逆の analogy があつたのではないかと想像する事が出來る。失はれようとしてゐた、或は失はれた yaṅ ḥjug =d に代へて他方に「時」を示すものとして用ひられようとしてゐた da-drag の

=d を加く′ (I) の ste に對應するものを構成したのであらう。この analogy による =d te が先に見られた =d ste, -d ste にとつて代つたのは全く euphonique な優位にもとづくものでなからうかと解する。

以上の點′殊に -s te 又は =s te と′ -s ste 又は =s ste とが決して表記法の混亂を示すものでなく′夫々 (II) と (I) とを區別した痕跡であると出來ないだらうか。この事は敦煌文書の表記法によつても支持されると思ふ。

次に′一應九世紀初頭の唐蕃會盟碑について′同樣のことを調べて見よう。

East Inscription.

（イ） mol te [II, B, a']
（ロ） gśegs te [II, B, a']
（ハ） btul te [II, B, a]
（ニ） myed de [II, B, a]
（ホ） rgyal-po ste [II, C, a]
（ヘ） do ste [II,C, c]
（ト） mol te [I, a]
（チ） gyur te [I, b]
（リ） bsris te [II, B, b]
（ヌ） khyab ste [II, B, a]
（ル） dgyes te [II, B, b]
（ヲ） mol te [II, B, b]
（ワ） phyad de [II, B, b]
（カ） brtsal te [II, B, b]
（ヨ） ruṅ ste [II, B, a']
（タ） mthun te [II, C, a']
（レ） gñan te [II, A, a]
（ソ） mthun te [II, B, b]
（ツ） gcig ste [II, B, c]
（ネ） hdzegs te [II, B, a]

West Inscription

（イ） mdzad de [I, a]
（ロ） bya[s] te [II, B, a']
（ハ） bsruṅ ste [I, a]
（ニ） mthun te [II, B, b]
（ホ） mdzad de [II, B, a]
（ヘ） yul te [II, B, a]
（ト） dris te [I, a]
（チ） dgos te [II, B, b]
（リ） bya ste [II, B, a']
（ヌ） sbyar te [II, A, a]
（ル） grag ste [II, B, a]
（ヲ） brkyaṅ ste [I, a]
（ワ） khyab ste [II, B, b]
（カ） gsol te [II, B, c]
（ヨ） bsad de [II, B, a]
（タ） bor te [II, B, b]
（レ） bris te [II, B, c]

ここには最早 =s ste, -s ste は見當らない。他方、=d te もない。te が連る -n, -r, -l 等は da-drag を伴はず、今日の連聲法副と同じ樣子を呈する。これは te によつて da-drag の存することが明らかだから特に示されなくなつたのであらう。yaṅ ḥjug の =d と、ste の -s に對應して「時」の先行性を示した。=d とはもはや區別されてゐないわけである。この da-drag は、連聲關係をもつて、後續するものによりその存在が示されえない場合、この碑文にあつては明記されてゐる。それは、必ずしも「時」にのみは關係してゐないが、今日「時」を示すものとして認められてゐる da-drag[7] に近いものもあつたと考へられる。

唐蕃會盟碑の表記法が今日の連聲法則を殆んど忠實に反映して居り、既に第一種と第二種の用法を別種のものとは意識してゐなかつたに違ひない。同碑の西面の文には、相前後する二つの行爲 (I, a) が dris te によつて示されてゐる。

Shol の rdo riṅ に於ける表記法に從へば dris ste と記さるべきものである。ここには、analogy があるとすれば、第一種と第二種の用法に確かな混亂があつたとしなければならない。又、ste の s が落ちたとしても、用法的區別が背景から失はれてゐたことを條件としなければならぬであらう

僅かな期間をはさんで、これより先に用ひられた Shol の碑文の表記法は、特に、-s ste と -s te とについては、單なる表記法上の混亂を示すものだと云ふ人がゐるかも知れない。然し、數多くの燉煌文獻にも、この表記法に近い、或は、もつと古いかも知れないやうな表記法も取られてゐて、且つ、多少は混亂した樣子も見せるが、-s te と -s ste との區別を明らかに反映すると見做されるものが存する。

今、Stein 將來の燉煌文獻中の「月燈三昧經」の表記法を參考に擧げて置きたい。缺損した箇所も多いが、送中迄の全部を回數によつて示さう。以下に於いて、-s te; -s-te, =s-te と -□ ste とに比較して -ste, =ste、特に後者が壓倒的に多いことは -s に對する評價に混亂があつたと見られるもので、興味深い。

- -r te(10), -l te(2), -n te(8), -s te(7), =d te(7),=d de(1), -d de(10)
- -s-te(4), s-te(3) [s, te が並記され、區切られてゐない]
- -g ste(4), -ṅ ste(3), (-ḥ) ste(10), -s ste(2)
- gnaste, byaste, nuste, smraste etc.(18) paste, baste(2) [rjes ḥjug の -s と ste の -s が一體となつてゐるもの]
- hoṅste, byuṅste, migste, sñamste etc.(27) [yaṅ ḥjug の -s と ste の s とが一體となつてゐるもの]
- -b ste, -m ste はなく、皆 -bste, -mste(5) としてのみ存する。

ここでも明らかに -s te と (-s) ste の區別があつたとしなければならぬであらう。これに準じて -r, -l, -n 等の後にくるものを (=d) te と =d te とに分けて、その間にも區別を見立てることは出來ないであらうか。又、僅か一回しか見えない =d de を =d te に移る前の痕跡と見るわけにはゆかぬとしても、興味ある表記法と言へるであらう。

以上の資料をもつて前節までに述べた諸考察の裏づけに當てたいと思ふ。

註

(1) G. Tucci: "The tombes of the Tibetan kings" 1950 Roma, p. 100～104.

(2 3) H. E. Richardson: "Ancient historical edicts at lhasa and the Mu Tsung/Khri Gtsug Lde Brtsan treaty of A. D. 821～822 from the inscription at Lhasa" London. 1952.

(3) 李方桂「通報」XLIV "Inscription on the Sino-Tibetan treaty of 821～822."

(4) yaṅ ḥjug =d, =s, は述語構成の最も古い語尾辭と想像される。既に rjes ḥjug を帶びて各種の概念を示すに至つた語に連り、それらの概念に更に〝屬する〟との意味を加へて一語として抽象化される。これが他の概念の後に同格として配され、前置概念がその後置概念に關係をもつてゐることを表現しえた。例へば、chaḥ〝部分〟と =d とで chad〝分かれてゐるもの〟が出來、より具體的概念の同格語として連り、śiṅ (ni) chad 木は〝バラバラになつてゐる〟が示された。他方、或る具體的概念が同樣に抽象化されて、それが、その同格たるにふさはしい他の抽象化された概念を伴ふこともが出來る。この場合、例へば chod〝分れてゐる〟が後置同格概念となる時、前置概念の抽象化語尾辭が後置概念に寄託せられると、後置抽象概念を前置具體概念がもつものとして新しい表現が行はれることになる。抽象的なものの所有が前置された具體的概念について説明されることになる。卽ち、śin (ni) ḥchad〝木がくだける〟が出來上る。或物合、この種の述語が前の述語にならつて再び抽象化的附加をもつとき、いはゆる「過去」が成立するであらう。尤も、その間に前者の yaṅ ḥjug は失はれて、再びこの目的で拾い上げられたと想定されるわけである。この抽象化的附加である yaṅ ḥjug は他ならぬ過去を示すために專ら用ひられるものとなるのである。cf. Jacque Dürr: Morphologie du verbe tibétain, p. 63 ff.)

(5) ( ) 内は失はれた yaṅ ḥjug

(6) [ ] analogy により再生した s

(7) Jacque Bacot: "Ślokas grammaticaux de Thonmi

Sambhota p. 36. note では de と、過去と da-drag とを結びつけて考へる。Shol の碑文の用法からも、又註(4)の考へ方からも承服しがたい假説である。

(8) Shol の碑文に登場する Nan Lam Stag Sgra Klu Khon は Khri Sroṅ Lde Brtsan 王の最後から二番目の大臣をつとめた。この王は一般に、A. D. 979 年迄の治世とされるから A. D. 820 年代の唐蕃會盟碑との間は半世紀内外と見られる。

cf. Richardson : "Ancient-historical Edicts at Lhasa."

V あとがき

本文中、音の變化に關してもふれたが、それは私の志すところではない。ただ從來それらについて述べられて來たところを、文章構造の面から見て少なからず不審に思つたので、或はと思ふやうな事を加へたのである。

今日、版本で見られる ste には、〃他を引く〃 gshan ḥdren のごく一般的な用法が見られる。文典家の用例によれば、〃他〃とは云ひながらも、併存又は對立するやうな文に限られてゐた。今云ふ用法に登場する〃他〃はもつと自由なものである。が、全くの〃他〃ではない。それは、言語主體によつて、何か關係があると意識せられる限り、この ste を用ひて文が續けられるからである。いはば、一種の退化的用法なのかも知れない。往々、この種の ste 等にこだはつて文意を違へることもある。この樣な退化的用法にして、別の働きを示す構造も又少くないと思はれる。

Khri Sron Lde Brtsan 王の Edict に見られた表記法は、充分な檢討を缺いたまま用ひたから、如何にも奇妙な感を免がれない。shol の碑文とは年代的に隔りも大きくないのに、全くかけはなれた樣な表記法をとつてゐるからである。ただ、一縷の期するところがあつた。この Edict の文體は或は權威を示すためのものだつたのかも知れない。ために、より古い樣式に從つたのではなからうかといふのである。

(東洋文庫研究生)